
ジャネンバ戦記

俺がベジータだー！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャネンバ戦記

【Nコード】

N3576W

【作者名】

俺がベジータだー！！

【あらすじ】

事故で死んだ男子高校生が何故かジャネンバの姿になってしまった。しかもここはネギまの世界！？この小説は一発ネタ 何故かジャネンバになってしまったが好評だったので書いた小説です。若干内容が変わっている所もありますのでご了承ください。

第1話（前書き）

また書いてしまった。

第1話

俺の名前は鈴木一樹、ドラゴンボールが好きな普通の高校生だ。

突然だが、俺は死んだ。

何故死んだのかというと、自転車で帰宅途中していた所をトラックが後ろから突っ込んできたのだ。

一瞬の出来事だった。少しの間意識があったが俺はすぐに意識を失った。

どれだけの時間が経ったのだろうか？

意識が戻り目を開けると、そこには湖と森があるだけだった。

「ここが天国って所か、閻魔王のおっちゃんはいないんだな。」

そう口にすると、異変に気づいた。

何故か声が変わっている。

変だなと思い自分の身体を見た。その瞬間、固まった。

「は、はは、そ、そんなバカな事が…」

そう言いながら近くにある湖に近づき自分の顔を見て、また固まる。

そこには、赤い顔で頭に2本の角があった。

「な、なんじゃこりゃー！！！！！！」

そう、俺は劇場版ドラゴンボール最強の敵、ジャネンバになっていたのだ。

しばらくして落ち着いた俺は、自分の状況を確認していた。

俺はトラックに跳ねられ死んで、何故かジャネンバになっていた。そしてここが何処だかは不明。

…情報が少なすぎる。

そもそもここは一体何処なんだ？地獄ではなさそうだしそもそもこんな所ドラゴンボールにはない。

まあ、悩んでも仕方がないか。とりあえず人を探そう…

……って俺ジャネンバの姿だからダメじゃん！！こんな姿見られたら絶対追われるだろ！！

はあ、なんでジャネンバなんだよ、どうせならベジータが良かったよ。

まあ、なっちまったもんはしょうがねえか。取り合えずこの身体のスベックを見よう。

そう思い、近くにある木を軽く殴る。

すると、木がベキベキと倒れ、近くの木に当たるとまたその木がベキベキと倒れた。

……さすが劇場版最強の敵、軽く殴っただけでこれか。

てかジャンバの力があれば世界征服もできるな、しないけど。

次は身体を分解しよう。と言っても分解の仕方など分からないから、分解しろゝ等と思っていたら本当に分解できて少しびびった。

しかし周りが見えるのに自分がないのは少し変な感じだな。

とりあえず元に戻ろうとしたが、人の声が聞こえたので止めた。

声がした方を見ると、二人の男が大きな袋を持って走っていた。

「へへへ、まさか本当に皇女を攫えるとはな。」

「護衛も付けずに出歩くとはバカな奴だ。」

「もががが！もがー！！！」

「うわ！？くそ、暴れるな！！！」

どうやら人攫いの様だ、あの大きな袋に誰が入っているようだ。

しかもあいつら皇女って言うていたからかなり位の大きい人物の様

だ。

ふむ…皇女さんを救って恩を売るのも悪くないな。

思い立ったが吉日と俺は姿を現した。

「うわ！？な、なんだてめえ！！？」

「ば！化け物だ！！」

物凄く慌てる男二人組み。まあいきなりジャンバが現れたらね。

「この化け物め！これでもくらえ！！」

一人が懐から杖をだし、何やら呟く。

「これでもくらえ！！魔法の射手！！」

男がそう言つと、火で出来た矢が飛んできた。

それを見た瞬間、俺はここが何処かわかった。

ここはネギまの世界だ、何年か前に読んだが結構面白かった。大分忘れていたけど。

余談は置いて、取り合えず分解して矢を避ける。

「な！き、消えた！！」

「身体がブロックのようになったぞ…」

そう言っている男二人の後ろに俺は現れ、二人を軽く殴る。

「ぎゃああー!!」

「ぶべらー!!」

そんな声を出しながら吹っ飛んでいった。流石ジャネンバ凄い力だ。そう思いながら袋を見る。もごもごと蠢いている。

ん?ここはネギまの世界だろ?て事は皇女と言うのは…

悪い予感を抑えながら俺は袋を開いた。すると…

「むぐー……!!?!?」

テオドラさんが目を大きく開いて叫んでいました。

なぜお前がここにいる。

「むぐぐぐー!!」

呻きながら逃げようとするが手足を縛られて動けない。目に涙が溜まっている。

……こんな姿だからこうなると分かっていたが結構ショックだな。

少し気持ちがブルーになるが、とりあえず口に縛ってある布を取る。

「ひええええ！？妾は美味しくないのじゃー！！食べないでたもー！！」

「食べるか！！」

思わずピッコロさんの名言が出てしまった。

「ほ、本当に妾を食べないのか…」

「ああ、第一不味そうだし。とりあえず縄を取るぞ。」

そう言って縛ってある縄を切る。

「ふう、ようやく自由になったのじゃ。所で、妾を攫った奴は何処にいったのじゃ？」

どうやら俺は敵ではないと判断したらしく、俺に話しかけてきた。

「あの男二人組みなら俺が遠くに飛ばしてやったよ。」

「おお！それはよくやったのじゃ！褒めてつかわす。」

皇女なだけに態度がでかい。

「ところで、お前の名前は？」

知っているが一応聞く。

「妾はヘラス帝国第三皇女テオドラと申す。そう言ってお主の名前はなんじゃ？」

俺の名前か…

「俺は……ジャネンバだ。」

「ジャネンバ？変わった名前じゃの。それにしてもジャネンバは一体何者なんじゃ？ジャネンバの様な者は初めて見るぞ。」

ネギまの世界では悪魔等がいるがジャネンバの様な生き物など存在しないからな。

「まあ、俺はこの世界には存在しない筈の生き物だしな。」

「どういうことじゃ？」

コテンと首を傾げるテオドラに俺は説明をした。

「俺はこことは違う世界からきたんだ。」

「ふむ、ではジャネンバは旧世界から来たのか？」

「違う、俺はこの世界とは違う世界、異世界から来たんだ。」

「異世界じゃと！？な、なるほど、それなら説明がつくのじゃ。」

「……疑はないのか？」

「妾はジャネンバの言う事を信じるのじゃ。」

「随分と信頼してくれてんだな。」

「妾を助けてくれたからの。顔はちょっと怖いが…」

「人が気にしている事を。」

「ジャンェンバは人では無いじゃろ。」

そういえば俺はもう人外になっちまったんだ。

「そろそろ帰らねばならんのう。お父様も心配しておるじゃろうし。」

「

「テオドラはここが何処か知っているのか？」

「知ってるわけなからう。妾は連れ回されたんじゃぞ。」

「じゃあどうやって帰るんだよ。」

「うゝむ、ジャンェンバ、何とかしてほしいのじゃ。」

「何とかしろと言われても…」

そう言いながら俺は気を探る。すると少し遠い所から沢山の気が感じられた。

「多分向こうだと思っぞ。」

そう言って指を指す。

「本当か！でもなんでそんな事がわかるのじゃ？」

「テオドラは気を知っているか？」

「うむ、知っておるぞ。」

「俺は気を探つて人を見つけることが出来るんだ。そして向こうの方角に沢山の気があった。おそらくそこだろう。」

「ほおお、随分と便利じゃな。」

「まあな。少し遠いから飛んでいくぞ、背中に乗れ。」

そう言つてうつ伏せながら浮かぶ。

「うむ、わかつたのじゃ。」

そう言つて背中に乗るテオドラ。

「それじゃ、行くぞ。」

そう言つて俺は飛び始めた。

悪人面の化け物が背中に少女を乗せて飛ぶ光景。

…悟空とベジータが見たらすつ飛ばすような光景だったとここに記入しておく。

第1話（後書き）

はい、と言う訳で今度の主人公はジャンバに憑依した高校生です。

また途中で止めるかもしれませんが皆さんよろしくお願いします

第2話

あれからしばらく飛ぶと、かなり大きい街が見えてきた。

「へえ、結構大きいじゃないか。」

「当然じゃ！ここはヘラス帝国の首都、ヘラスじゃからの！」

そう言つて胸を張るテオドラ。

「それで、何処に降ろせばいいんだ？」

「あそこにある宮殿の中庭に降ろしてほしいのじゃ。」

そう言つて指を指すテオドラ。お望み通りに俺は中庭に着地した。

すると宮殿の中から兵士がワラワラと出てきた。まあ攫われた皇女が悪人面の化け物と一緒に飛んできたなら誰だって警戒するだろう。

「貴様！何者だ！姫様から離れる！！！」

隊長らしき人物が杖を突きつけながらそう言ってきた。

「皆の者！武器を収めるのじゃ！この者は誘拐された妾を助けてくれたのじゃ！！！」

「な！？それはまことですか？」

「うむ、そうじゃ。」

「…皆の者、武器を下ろせ。」

隊長らしき人がそう言つと、兵士は武器を下ろした。

「すみません、姫様を助けて頂いたとは知らずに…」

「いや、構わんよ。俺の様な化け物と一緒にいては警戒されるのも無理は無い。」

俺はそう言つて自嘲気味に笑つ。すると少しの間沈黙が続いた。耐え切れなかったのか隊長が少し大きな声で言つた。

「…そ、それよりも、皇帝様が姫様の帰りをお待ちしています。会いに行つては如何でしょうか？」

「そ、そうじゃな！お父様も心配しているじゃろつし、それにジャネンバも紹介せねば。」

そう言つて歩き出すテオドラ。

「ジャネンバ！妾について来るのじゃ。」

「わかつた。」

俺はテオドラの言つとおりについて行つた。

テオドラについて行つた俺は今、皇室でヘラス帝国の皇帝と向き合っている。何故こうなつたのかと言うと、お礼がしたいだそうだ。

周りにいる人は俺の姿に戸惑っている様だが、皇帝は俺の姿を見ても眉一つ動かさないでいた、流石皇帝なだけある。

そう思っていると、皇帝が口を開いた。

「娘を助けて貰つて本当に感謝している、ありがとう。」

「いえ、当然の事をしただけです。」

「ふむ、しかし娘がモンスターに助けられるなんて思つてもいなかつたぞ。」

「俺をそこら辺のモンスターと一緒にしないで頂きたい。」

「おお、すまん。それと褒美の件だが…ここに住まないか？」

「え？」

「テオドラに聞くとお前は住む所も無いのだろう？ならここで住めばいい、衣食住は保障する。」

「…俺は別に構いませんがいいのですか？俺の様な化け物を宮殿に住ませて？」

「テオドラの恩人に化け物もないは。遠慮はしなくていい。」

「わかりました。」

「それと頼みたい事があるのだが…」

「何でしょうか？」

「テオドラに付き合っておいてくれんか？テオドラは宮殿の中が暇だと言つてすぐ外に出てしまうんだ。そのせいで誘拐されたんだがな。」

「つまり危険だから俺に護衛をさせよう？」

「うむ、そんなとこかな。」

「それならまあいいですよ。ただし、給料は払ってもらいますがね。」

「これはなかなか手ごわいな、まあいいだろう。話はこれだけだ、下がっていいぞ。」

「それでは、失礼します。」

そう言つて俺は王室から去つていった。

「ふう。」

ジャンンバが王室から出て行ったのを見た俺は、小さく溜息を吐いた。

「陛下、よろしかったのですか？あのような者を宮殿に泊めて。」

配下の一人がそう話しかけてきた。

「ああ、テオドラの恩人だしな。それに化け物と言って差別するなと俺の誇りが許さん。」

「陛下がそう言うのであれば。」

そう言って配下の一人は下がっていった。

それにしてもジャンンバは俺の見た目ではかなり強いと見た。

最近連合との間できな臭い事が起こっているからな、戦力確保には全力を注がねば。

ジャンンバは俺の配下ではないがおそらくテオドラが「妾の騎士になるのじゃ」と言って迫るだろう。そしてジャンンバはそれを受諾するだろう。これでジャンンバは俺の配下になるわけだ。

少し汚いが今は手段を取っている暇は無い。はあ、全くめんどくさい事になったもんだ。

そう思い、俺はまた小さく溜息を吐いた。

第2話（後書き）

ジャンンバって何気にイケメンだよね。

第3話

王室から出た俺は、これから住む部屋に案内された。

部屋は広く、中々豪華だった。

「そ、それでは何か御用がありましたら、このベルを鳴らしてください。」

そう言つて部屋を案内してくれたメイドさんが部屋から出て行つた。メイドさんの顔がちょっとわばつていたな…まあこんな姿だからな。

しかし俺は何でジャネンバ何かになったんだ？確かにジャネンバは好きなキャラだったが…

まあなつちまつたもんはしょうがねえか。どうせ俺は事故で死んだんだし、ジャネンバとして生きていくのも悪くは無い。

そんな事を思いながら俺は寝た。てかジャネンバも寝れるんだな。

翌日、目を覚ました俺は腹が減ったのでベルを鳴らした。ジャネンバも腹が減るんだね。

少し待つと、メイドさん達が朝食を持ってきた。昨日まで一般人だった俺には凄い豪華な朝食だ。

昨日から何も食べていない俺はたまらず朝食に齧り付く、かなり美味かった。

朝食を食べ終わり、何しようかなと思っていると。

「ジャネンバ！おはようなのじゃ！！」

バン！と勢いよく扉を開いてテオドラがやってきた。

「朝っぱらからテンション高いな。それで、何のようだ？」

「暇だから遊びにきたのじゃ！」

「はいはい、それで、何するんだ？」

「そうじゃのう、ジャネンバの事が知りたいのじゃ。」

「俺の事を？」

「そうじゃ。ジャネンバは一体何ができるんじゃ？」

「そうだなあ…俺は空間移動が出来るぞ。」

「空間移動？なんじゃそれは？」

「聞くより見る方が早い、今見せてやるよ。」

そう言って俺は身体を分解する。

「な、何じゃ！！ジャネンバの身体がブロックみたいになって消えたのじゃ！！」

目を見開いてそう言うテオドラ。

「まあ、こんな感じだな。」

そう言いながらテオドラの後ろに姿を現す。

「おお！凄いのう！！」

「ああ、空間移動はかなり便利な能力だからな。」

「そんな凄い能力を持っているんじゃないたら、ジャネンバもかなり強そうじゃな。」

「実際強いぞ。」

おそらくこの世界で俺に勝てる奴などいないだろう。

「うゝむ、ジャネンバがどのくらい強いのか見てみたいのじゃ。」

「別に俺は構わんが、一応皇帝にお前の護衛を頼まれてるから俺の強さを把握しておいた方がいいからな。」

「そうじゃな、ではさっそく戦ってもらうのじゃ。」

あの後、俺は訓練所に呼ばれた。どうやらここで戦うらしい。

俺の前には兵士が100人ほどいる。服装からして近衛兵だろう。

何故100人かと言うと、皇帝がこれくらい倒さなければテオドラの護衛は勤まらないとか。

因みに剣を持った兵士が50人で杖を持った兵士が50人だ。

何処で聞きつけたのか、野次馬もたくさんいる。

「これより、模擬戦を始める!!」

審判らしき人がそう言う。

「相手は一人だけかよ、こりやすぐに終わりそうだな。」

「いや、あの姿を見ろよ。あいつ相当強いぞ。」

「確かに強そうだがこっちは100人いるんだぞ？数で押せばいけるぞ。」

どうやら兵士達はかなり樂觀しているらしい。

「お前ら、私語は慎め。」

審判がそう言うと、静かになった。

「それでは、試合開始!!」

審判がそう言うと同時に、兵士が動いた。

剣を持った兵士が四方に散らばり、杖を持った兵士は魔法の矢を放ってきた。

恐らく魔法で制圧しながら配置に着くのだろう。なるほど、さすが近衛兵だ。だが相手が悪かった。

俺は手の甲を前にして腕を広げる。すると丸い鏡みたいな物が俺の前に現れる。映画で使っていたやつよりかなりでかい。

そして鏡のような物に魔法の矢が当たると、魔法の矢はその中に吸い込まれた。

『なに!?!』

まさか魔法の矢が一つ残らず吸い込まれるとは思ってもいなかったのだろう。兵士が驚愕の声を上げる。

そしてその隙だらけの杖を持った兵士の上空に丸い鏡が現れ、魔法の矢が降り注ぐ。

「ぐわああああ!!!!」

「ぎゃああああ!!!!」

「な、何で魔法の射手が…っ!!」

これにより杖を持った兵士は壊滅状態になった。

「く、くそ！皆の者怯むな！突撃！」

隊長がそう言い、剣を持った兵士が向かって来た。

「うおおおお!!」

そう叫んで一人が切り込んできた。

俺はそれを身体を少しずらして避け、腹に一発お見舞いする。

「がはあ!!」

後ろにいた3人を巻き込みながら飛んでいった。

「もらった!!」

隙を見た一人が背中に切り込んできたが、尻尾でなぎ払う。

それでもワラワラと俺に向かってくる。めんどくさいので気を放出してなぎ払おう。

「はああ!!」

ドヒュウ!!と見えない気が放出され、耐え切れず全員が飛ばされ、動かなくなった。

「ふん、もう終わりか。」

そう言っただけ審判を見る、審判はポカーンとしていたが気づいて勝敗を言う。

「しょ、勝者！ジャネンバ！！」

審判が上ずった声でそう言っただけ、歓声が上がった。

「すげえ！本当に勝ちやがった！！」

「近衛兵100人を僅か1分で…あいつ何何者だ？」

歓声を聞きながら俺はテオドラの所にいった。

「どうだ？俺の強さは？」

「何というか…もの凄かったとしか言えんのじゃ。」

「あの近衛兵はそれほど強かったのか？」

「うむ、そうじゃ。帝国ではかなり強い部類に入るのじゃ。」

「ふむ、やはり俺が強すぎるのか。まいったな、まだ本気の1%も出していないのに。」

「な、なんじゃと…」

そう言っただけ呆然とするテオドラ。肩がプルプルと震えている。

「決めたのじゃ！ジャネンバ！妾の騎士になるのじゃ！！」

「はあ！？」

「その圧倒的な強さを持つお主の主はこの妾こそがふさわしい！！」

そう熱弁するテオドラ。

「…まあ、別にいいけどさ。」

「うむ！それではパクティオーをするのじゃ。部屋に戻るのじゃ。」

「パクティオー？何だそれは？」

うゝむ、忘れてしまったな。

「従者契約のことじゃ。」

「何で部屋に戻る必要があるんだ？」

「う、そ、それは……は、早く部屋にいくのじゃ！！」

「ちょ！引つ張るなよ！」

こうして俺はテオドラに引つ張れて部屋に戻った。

パクティオーの契約の仕方も知らずに…

第3話（後書き）

魔法世界の兵士の種類が分からないから適当に書いた。誰か教えてくれ。

第4話

あの後、テオドラに引つ張られた俺は今、テオドラの部屋にいる。

だが、テオドラは顔を少し赤くしたりして落ち着きが無い。

「どうしたんだ？そんなにそわそわして。」

「な、なんでもないのじゃ！そ、それよりも妾と同じ目線になるように屈んでほしいのじゃ。」

「何で屈む必要が？」

「~~~~ツ！！いいから早く屈むのじゃ！！」

何か知らんが怒鳴られたので、言うとおりに俺は屈む。

「屈んだぞ。」

「う、うむ。それでは……」

そう言つてテオドラは俺に顔を近づけ、キスをした。と、同時に契約の仕方も思い出した。

ぬおおお！！もう思い出しても遅いよ！！て言うかこれ犯罪になるんじゃ！！

俺の頭が混乱している内に、契約は無事に成功したようだ。

「ああ…俺の初めてが…こんなガキに…」

「む、失礼な、妾のような美女にキスされたんじゃぞ。もっと喜ぶのじゃ。」

「俺はロリコンじゃねえ。」

何が悲しくて10歳位の少女とキスせにやならんのだ。

「そんなことより、カードが出来たのじゃ。」

そう言つてカードを見せてくるテオドラ。

「このカードにはどんな効果があるんだ？」

「そうじゃのう。まずアデアットと唱えると専用の魔法具であるアーティファクトを呼び出すことが出来るのじゃ。」

「ふん、じゃあさっそく。アデアット。」

そう言つと、俺の手に一本の剣が現れた。その剣は剣身が濃い桜色で鍔が薄い紫色だった。こ、こいつはッ…!!

「うむ、中々かっこいい剣じゃな。どれどれ名前は…ディメンションソード？名前もかっこいいのう。」

テオドラがそう言っているが俺は歡喜に打ち震えていた。ジャネンバにはやはりこの剣がなくては。

「うむ？ジャネンバよ、嬉しそうじゃな。」

「ああ、こいつは俺の相棒だからな。」

「ジャンンバがそう言うのなら余程の物なんじゃな。」

「まあな、一振りすれば数百メートルも斬れるからな。」

「なんじゃその剣は、反則じゃな。」

「そういえばどうやったらこの剣を仕舞えるんだ？」

「アベアットと唱えれば仕舞えるのじゃ。」

「わかった。アベアット。」

そう唱えると、ディメンションソードは消えた。

「他には何か無いのか？」

「そうじゃのう、カードをおでこに当てると念話で離れていても話す事ができるのじゃ。それと10kmが限界じゃが妾がジャンンバを召喚することも可能じゃ。」

「ほう、カードは中々便利だな。」

「うむ、あと妾の魔力を流す事でジャンンバの身体能力を上げる事も出来るんじゃが…」

「お前の魔力を流しても俺にはあまり効果がないだろ。」

「うむ、悔しいがその通りじゃ。」

精々戦闘力が300位上がるだけだしな。俺には必要ない。

「まあこんなもんじゃのう。」

「いやしかし、ディメンションソードが自由に取り出せるのは嬉しい誤算だ。この事に関しては礼を言うぞ。」

「むふふふ、そう褒めるでない。」

テオドラがそう言い終わると、テオドラの腹からクゥと情けない音が鳴った。

「ふむ、そろそろ昼飯の時間か。」

「うむ、そうじゃのう。妾のお腹が悲鳴を上げているのじゃ。」

テオドラこそう言つと、俺の身体を器用に上つて肩に乗った。

「さあジャネンバよ！食堂にレッツゴーじゃ！ー！」

「はいはいわかりましたよ、お嬢様。」

そう言つて俺は食堂に向かった。

第4話（後書き）

剣の名前はレイジングブラスト2の究極技から取りました。あとあまり出番ないかも。正直微妙なんだよねこの剣。

第5話

俺がネギまの世界に来てから早くも6ヶ月が過ぎ、そして戦争が始まった。

以前よりきな臭かった帝国と連合がついに衝突し、大分烈戦争と呼ばれる大戦争にまで発展してしまった。

そして今、俺は会議室にいる。皇帝は俺を最前線に投入させて一気に方を付けようとしてる様だが。

「ダメなのじゃー！！ジャネンバを戦地なんかには行かせないのじゃー！！」

この通り、俺の主であるテオドラが頑固拒否の姿勢を取っているのである。

「だがなあ、テオドラ…」

「ダメなものはダメなのじゃー！！」

「まあまあ陛下、よろしいではありませんか。」

「左様、我が帝国は連合に対して連戦連勝、オスティアもすぐ落とせるでしょうし、この者の力を借りなくても、帝国は勝てるでしょう。」

「いやしかし、もしもの為にはやはり…」

「むうー！！お父様はしつこいのじゃー！！そんなお父様など大嫌いじゃー！！」

「大嫌い……ガーン！」

そう言つて皇帝はorzの格好をする。それでいいのか皇帝。

「お父様など知らないのじゃー！！ジャネンバ！行くのじゃー！！」

「はいはい。それでは失礼します。」

そう言つて俺とテオドラは会議室から出て行つた。

会議室を出たのは良いが、テオドラがかなり機嫌が悪いので街に連れて行くことにした。

俺は肩にテオドラを乗せ、街を歩く。

「ジャネンバよ！次は向こうじゃー！！」

「はいはい、わかつたよ。」

テオドラの言つがままに俺は動く。

「おお、テオドラの嬢ちゃんとジャネンバじゃねえか。二人でデー

トか？熱いねえ。」

「お、たこ焼き屋の親父さんじゃないか。あと何でこんなガキとデ―トせにやなんのだ。」

「ははは！すまん。たこ焼き一つ買っていくか？」

「ああ、貰っておこう。」

俺も大分この街に溶け込んできた。初めはこの姿のせいで怖がられたが今は皆も慣れたのか気さくに話しかけてくれる。あと何故たこ焼きがあるのかは知らん。

ん？いつも騒がしいテオドラがやけに静かだな。

「妾とジャンバがデート…しかし妾達は種族が違うし…いや別にジャンバの事は嫌いではないが…むしろゴニョゴニョ…」

何やら自分の姿に入っている様だ。

「おい、テオドラ。」

「ほえ！？な、なんじゃ！」

「お前もたこ焼き食べるか？」

「え？あ、食べるのじゃ。」

「親父、もう一つくれ。」

あいよ、つと返事をする親父。少し待つと出来立てのたこ焼きが出てきた。

「うむ、やはり出来立ては美味しいな。」

「はふはふ、そうじゃな。」

そうやってたこ焼きを食べている俺達に、後ろから声をかけられた。

「おい！そこのお前！！」

「ん？」

振り返るとそこには、筋肉達磨もといジャックラカンが仁王立ちしていた。

「なんじゃこの筋肉達磨は？」

「筋肉達磨じゃねえ！俺様は世界最強の傭兵、ジャックラカン様だ！！」

「自分で世界最強とか言つてやがる。すげえ痛い奴だな。」

「うむ、痛いのが。」

「で？その世界最強の傭兵（笑）が何のようだ。」

「俺様と勝負しろ！！」

「は？」

「人目見ただけで分かった。お前は相当の実力者だと。」

「そりゃ光栄だね。」

「俺様は強い奴を見るといてもたってもいらねえんだ。まあ最終的に勝つのは俺様だな。」

そう言つてラカンとはH A H A H Aと笑う。

「ふゝん。だがことわ「面白い！受けて立つのじゃ！」「うおい！何勝手に言つてんだテオドラ！！」

「いいではないか。この男に誰が世界最強なのか見せてやるのじゃ。」

「ほゝお、この俺様に勝利宣言とはいいい度胸だ。」

「はあ、もういいよ。それで？何処で戦うんだ。」

「前に模擬戦をした所でやるのじゃ。」

「いや、街の外でやった方がよさそうだ。ついて来い。」

「へ、久々に大暴れが出来そうだぜ。」

俺様はジャックラカン。世界最強の男だ。

仕事を求めてヘラスに来たが、仕事の相手はどいつもこいつも弱すぎる。ま、俺様は最強だからな。

誰か俺様と殴り合える奴はいないのかと思っていた所に、奴が目に入った。

奴は今まで見たことのないやつだった。そして俺様の本能が告げる、こいつは本物だと。

俺様の身体がプルプルと打ち震えた。こいつと戦いたいと。

「おい！そこのお前！！」

気づけば俺様は奴に話しかけていた。

「なんじゃこの筋肉達磨は？」

奴の肩に乗っていたガキが話した。誰が筋肉達磨だ！！

「筋肉達磨じゃねえ！俺様は世界最強の傭兵、ジャックラカン様だ！！」

「自分で世界最強とか言ってやがる。すげえ痛い奴だな。」

「うむ、痛いのが。」

「で？その世界最強の傭兵（笑）が何のようだ。」

もの凄く馬鹿にされているが構わず俺様は言う。

「俺様と勝負しろ!!」

「は？」

「人目見ただけで分かった。お前は相当の実力者だと。」

「そりゃ光栄だね。」

俺様は強い奴を見るといてもたってもいられねえんだ。まあ最終的に勝つのは俺様だな。」

俺様は腕を組み、ハハハと笑う。確かに奴は強いが俺様は負けない。何故なら俺様だから。

「ふん。だがことわ「面白い！受けて立つのじゃ!!」うおい！何勝手に言っただテオドラ!!」

「いいではないか。この男に誰が世界最強なのか見せてやるのじゃ。」

「ほーお、この俺様に勝利宣言とはいいい度胸だ。」

本当にいい度胸していやがる。だがこのガキの言葉からして奴は相当強いらしいな。早く戦いたいぜ。

「はあ、もういいよ。それで？何処で戦うんだ。」

「前に模擬戦をした所でやるのじゃ。」

「いや、街の外でやった方がよさそうだ。ついて来い。」

奴はそう言って街の外に向かっていった。恐らく被害を軽くする為だろう。これなら心置きなく戦うことができるな。

「へ、久々に大暴れが出来そうだぜ。」

第5話（後書き）

な〜んか無理矢理感が…

第6話

あの後街から出た俺達は、草原で対峙していた。

テオドラは危ないから遠くに離れている。

「そう言えばまだお前の名前を聞いていなかったな。」

「そう言えばそうだな。俺はジャネンバだ。」

「そうか。ジャネンバ！そろそろ始めようじゃねえか。」

「ああそうだな。」

そう言っただけで俺とラカンがスッと構える。

そのまま二人は動かない。

お互い、隙を全く見せていないのだ。

ふむ、流石ネギまのバグキャラの一人だ、そろそろ仕掛けるか。

「ずあああ！！！」

俺はそう叫んでラカンに突っ込んだ。

「ぬ！結構速いな。」

ラカンがそう呟くが構わず右ストレートをお見舞いする。

だがラカンはそれをかわして俺に殴り掛かる。

俺はラカンから繰り出される拳を拳で防御する。

ダダダダダ！と機関銃のような連射速度で拳がぶつかり合う。

「は！まさか俺様のラッシュに着いて来れるとはな！！」

「ふん、ならもつと速度を上げようじゃないか！」

「ちょ！まで速すべべべべ！！」

俺のラッシュに着いてこれず俺の拳が当たる。

「どおおお！！」

バキ！と足でラカンを蹴り上げ、ラカンは空に打ち上げられる。

俺はピシユンと高速移動をして空に上がっているラカンの少し上に現れ、手をハンマーの様に組む。

「だあああ！！」

ドゴン！とラカンの背中に叩きつけ、ラカンはキーン！と音を立てて下に落ち、ドゴン！と地面にクレーターを作った。

「どうした？もう終わりか。」

俺は地面に降りながらそう言う。だが返事は無い。

「あれ？もしかして本当に終わりなのか？」

そう言って首をひねていると、殺気をぶつけられた。

「ククク……ハーツハハハ！」

ラカンは笑いながら穴から出てきた。

「今のは効いたぜジャンバ。だが俺様も伊達に無敵と呼ばれているからな。これくらいじゃ倒れねえよ。」

「全くしぶとい奴だ。」

「こんな楽しい試合を簡単に終わらせてたまるか。ジャンバなら本気でやってもよさそうだ。何せ俺様が本気になったら大抵の奴は瞬殺しちまうからな。」

そう言っただけでラカンは気を高める。ほう、この世界では驚異的な戦力だな。まあドラゴンボールが異常なんだろうけど。

「それじゃあ行くぜえ！！」

ラカンがそう言っただけで、さっきとは比べ物にならないほどの速度で突っ込んで来た。

「おらああ！！」

ラカンの右ストレートを俺は右腕でガードをし、左手で殴りつけるが、ラカンはそれをかわしてさらに俺に左手で殴りつける。

「チツ!!」

俺は後ろに飛び退くがラカンが逃がさないとばかりに俺に接近する。

「おらあ!!」

と突っ込んで来たラカンに尻尾をぶつけるが逆に尻尾を掴んで引き寄せてきた。

「ずあああ!!」

とラカンが右ストレートを放ってきた。俺はそれをまともに喰らい、吹っ飛ばされた。

ズザザザ!!と地面を削りながら数十メートル飛ばされ、止まった。

「はあはあ、へ、どうだ。今は効いただろ。」

ラカンがそう言うが、俺はムクつと立ち上がる。

「な!? 俺様の全力のパンチが効いてねえ!!」

「どうやら俺はお前を見くびっていたようだ。すまん、本気には本気でやるのが流儀だが生憎俺が本気を出したらここら一帯が吹っ飛んでしまふんでね。1万分の1の力を出してやる。それでもたんでもない力だから気をつけろよ。」

そう言うて俺は気を高める。俺の身体から紫の気の炎が俺を包み込

み、突風が吹き荒れる。

「うおおお!!?」

ラカンが足を踏ん張って耐える。

「はああああ!!」

グラグラと地面が揺れ始め、亀裂が入る。

「ああああああ!!!!」

そして、地面が盛り上がった。

バチバチと俺の身体から電気がスパークしている。俺もここまで力を出したのは初めてだ。やはりジャンバは凄い、1万分の1の力でもラカンを軽く上回っている。

「あ、あああ…」

ラカンは今まで感じた事の無い力を前に、足がガクガクと揺れている。

「どうした?足が揺れているぞ。それに俺はまだ一万分の1の力しか出していないぞ。」

「…へ、武者震いだ。」

強がってそう言っているが冷汗をダラダラとかいて顔も真っ青だから説得力皆無である。

「それじゃあ、行くぞ!!」

ドヒュウ!!と地面を踏み込んでラカンに接近し、腹に殴りつける。

「ッ!!!!」

声も出る暇も無いほど速く、ラカンは数百メートル地面に引きずられる。

俺は高速移動でラカンの前に出て、さらに足蹴りをする。

「ぐはあああ!!!!?」

数十メートル打ち上げられ、重力に従い地面に叩きつけられる。

「あ、あつうつ…」

ラカンの身体にはいたる所から血が出ている。

「どうやらここまでのようだな。」

「ちくしょう…俺様の完敗だ…だが次は負けんぞ。」

「ふん、1万分の1の力に手も足も出ないお前なぞ一生かかっても無理だ。」

「確かにそうかもな…だが、俺様は諦めんぞ。」

「まあ再戦はいつでも受け入れる。」

俺はそう言ってラカンに手を差し出す。

「すまねえ。」

「いやなに、街まで送って行ってやろうか？」

「頼む、今の俺様じゃ立ち上がるのが精一杯だ。」

こうして俺達は街に向けて歩き出した。

はて？何か忘れているような…まいつか。

「ぬおおおお！！足が挟まって動けないのじゃー！！ジャネンバ早く助けるのじゃー！！」

テオドラは三時間後に無事ジャネンバによって助けられました。

第6話（後書き）

追記1%の力でもジャンンバでは強すぎたので1万分の1の力にしました。

第7話（前書き）

今回かなり時間を飛ばします。

第7話

ラカンとの戦いから早7ヶ月が過ぎた。

ヘラス帝国の戦況は、たった5人の精鋭部隊により覆された。

その精鋭部隊の名は紅き翼。だが俺の知っている紅き翼の今の人数は4人のはず、恐らく俺と同じようにこの世界にやって来たんだと思う。

オスティア回復作戦はこの紅き翼によって敗北した。

ここからが本当の地獄だった。何せたったの5人で優勢だった戦況を反転させられるのだ。帝国としてはまさに悪夢だろう。

慌てた帝国は俺に何度も戦場へ行って欲しいと頼んだが、そのつと主のテオドラに拒否された。

さらに慌てた帝国は、世界最強の傭兵ジャックラカンを送り込み紅き翼を抹殺しようとしたが、見事に裏切られ逆に紅き翼の仲間になっってしまった。

これによりさらにさらに慌てた帝国だが、幸いな事に連合は紅き翼を辺境の地に移動させられた。恐らく紅き翼がいると自分らの手柄が無くなるからだとかそういう理由だろ。末期だな。

これ幸いと、帝国は大規模移転による攻撃で要所、グレートブリッジを占領した。

だがここは連合にとっても重要な場所で、奪還作戦が決行されるらしい。さらにその作戦に紅き翼も投入するという情報を掴んだ。

それでまた俺に戦場に行ってくれと頼んだがテオドラは首を横に振るばかり。

そうこうしてるうちに、連合によるグレートブリッジ奪還作戦が始まった。

戦況は悪い。紅き翼の圧倒的な火力により要塞は崩され、大混乱に陥っている。所々で各個撃破され、もう撤退する他ない。それでその撤退を援護してほしいと泣きながら念願してきた。

「姫様！このままでは我が兵の半数以上が失われてしまいます！！どうかご決断を！！」

「うゝむ、いやしかし…」

流石のテオドラも気持ちが揺らいでいる様だ。

「テオドラ、俺は別に行ってもいいぞ。」

「じゃが相手はあの紅き翼じゃぞ！？もしものことがあったら…」

「大丈夫だ。俺は負けない、絶対にだ。」

俺は堂々と言い放った。テオドラは目を瞑り、そつと話した。

「わかったのじゃ。じゃがジャンバ、必ず生きて戻って来るのじゃぞ。」

「俺が死ぬとも思っているのか？逆に殺してやるよ。」

そう言つて俺は空間移動をして戦場に向かった。

空間移動でグレートブリッジに着いたが、思ったよりも酷い状況だな。

あちこちで人が倒れているし、兵士は混乱していて右往左往の大騒ぎだ。指揮官はおらんのか。

「お前ら落ち着け！！！」

でかい声で俺がそう言つと、皆が一斉に俺を見る。

「あ！貴方は！！！」

前に俺と模擬戦で戦った奴がいた。何故近衛兵がここに居るのかは知らんが。

「俺は第三皇女・テオドラの命により撤退を援護しに来た！この指揮官は？」

「し、指揮官は、戦死しました！」

「そうか！それでは臨時に俺が指令を出す！お前らは武器や食料を出来るだけ持ち撤退しろ！そしてこの命令を他の部隊にも伝える！俺はお前らが撤退するまで敵を食い止める！！」

「貴方一人ですか！？無茶です！いくら貴方が強くても一人では！！」

「大丈夫だ！俺を信じろ！！さあ何をしている！！さっさと撤退しろ！！」

「す、すみません！！」

そう言っただけは撤退の準備を始めた。

「さてと、向こうにでかい気が6個、その内の一つが転生者か。久々に楽しめそうだ。」

何時の間にかかなり好戦的になった俺だった。

俺の名前は藤原大輝、見ての通り転生者だ。

事故で死んで神様に会ってチート能力を貰うというよく見かけるパターンだ。

まあ俺は昔から運が良かったからな。

俺は今紅き翼の皆と一緒にグレートブリッジ奪還作戦に参加している。

唯でさえ原作では最強の紅き翼にチート能力を持った俺が加わっているのだ。帝国軍はすぐに総崩れだ。

「しかし、齒ごたえが無い奴らばかりだな。」

ナギがつまらなさそうに言う。

「まあそう言うな、俺らが強すぎるんだ。」

「へ、まあな。俺は世界最強の魔法使いだからな。」

俺はナギと軽口を言いながら戦場を歩く。

だが、突如物凄い気が現れた。

「な、なんだ！？この馬鹿でかい気は！？」

「どうやら誰かが転移してきた見たいですね。」

アルが気楽そうに言うが、額に汗が出ている。

「へ！まさか帝国にもこんな奴がいるとはな。楽しめそうだなあラカン！」

ナギがそう言ってラカンの方を向くが、ラカンの様子がおかしい。冷汗を引くぐらいにかき、全身が震えている。

「ど、どうしたんだ？」

あまりの様子にナギが声を掛ける。

「奴だ、奴が来る…」

ラカンが震える声でそう言う。

「何だよ奴って？」

「帝国にいるジャネンバって言う奴だ。」

「ジャネンバ？聞いた事ねえな。」

ナギがそう言うが俺は頭の中が真っ白になった。

ジャネンバ？ドラゴンボールのあのジャネンバか？だが何故奴がここに？もしか俺と同じ転生者か？

「聞いた事ありますね。確か帝国の皇女を誘拐犯から救い、さらに近衛兵100人を一分で倒したとか。」

「へ！俺の方がもっと早く倒せるぜ！」

ナギがそう言うが俺はよく一分も持ったなと思った。ジャネンバなら一秒でも全滅できるだろ。

「だけどラカンはなんでそいつの事知ってるんだ？」

「…実は俺はジャネンバと戦った事があるんだ。」

おいおい、よく生きていたな。

「だが、結果は俺の完敗。信じられるか？奴は俺の本気のパンチを受けても平然としているんだぜ？」

「そんなに強いのか！？くく！早く戦いてえぜ！！」

「よせ！ジャネンバとは絶対に戦うな。奴は次元が違いすぎる。」

確かに俺たちとは次元が違う、違いすぎる。

「ラカンがそこまで言うとは珍しいな。」

詠春が珍しそうに言う。

「ああ、それにジャネンバはまだ1万分の1の力しか出してないと言った。その力に俺は手も足も出なかった。本当に化け物だよ、あいつは。」

「誰が化け物だって？」

後ろからいきなり声が掛けられ、臨戦態勢を取りながら後ろを向くと、そこには想像通りのジャネンバがいた。

俺、生きて帰れるかな？

第7話（後書き）

次回、ジャネンバ無双。

第8話

俺は要塞から空間移動をして紅き翼の後ろに出た。見ると、何やら全員で話をしていた。

「ああ、それにジャンバはまだ1万分の1の力しか出してないと言った。その力に俺は手も足も出なかった。本当に化け物だよ、あいつは。」

「誰が化け物だって?」

思わず俺がそう言っていると、全員が臨戦態勢を取りながら振り向いた。

「ジャ、ジャンバ!!?」

「久しぶりだなラカン。何お前裏切ってるんだよ。」

「いやあのこれはその…」

ラカンは冷や汗をダラダラとかきながら言い訳を言おうとしている。

「まあいい、どうせ全員倒すんだからな。」

そう言っただけ俺は気を上げる。

「はっ!!!」

ドン!!!と突風が吹き荒れ、石などが宙を舞う。

「ぬおおお!!」

「な!?!」

「まさか…これ程とは…」

「これはやばいのう。」

「ええ、本当にやばいですね。」

「いや、まだだ。まだジャンネンバは1万分の1の力も出してねえ。」

「あ、あれで一万分の1も出してないだと…」

「なるほど、ラカンがああも怯える理由が分かりましたよ。」

「お喋りはそこまでにして貰おうか。」

俺がそう言つと、全員が構えた。

「それじゃあまず…お前からだ!!」

そう言つて俺はナギに突っ込む。

「な!?!はや」

速いと言つ暇も無く、俺の拳はナギを捕らえた。咄嗟に腕を交差させてガードをしたのは褒めてやりたい所だが、俺の攻撃の前では意味をなさない。

「ずああああ！！！！」

ドゴン！！！と俺の拳はナギの腕に当たり、ボキ！と腕が折れる音がする。さらに衝撃で後ろに吹っ飛ばされる。

「ぐああああ！！！？」

「ナギ！ちくしょう！やっぱ強すぎる！！」

「そう言えばまだ俺の得意技を見せてなかったな。」

「はあああ！斬岩剣！！」

後ろから剣を持った男が斬りかかって来た。名前は忘れた。

俺はそれを分解して避ける。

「な、なに！？」

剣を持った男の動きが止まり、俺はその隙に右手に気弾を持ってぶつける。

剣を持った男の腹の少し前から気弾を持った俺の腕が出て来てその気弾が腹に当たり、爆発した。

「がはああ！！！？」

男は吹っ飛ばされ、動かなくなった。

「な、何だ今のは！？」

「どうだラカン？今のが俺の得意技、空間移動さ。」

俺がそう言って話していると、身体がほんの少し重くなった。

「ん？なんだ？身体が少し重くなったぞ。」

「私の全力の重力魔法を受けても平然としているとは……」

「ふん、俺を倒したければこの100倍は持って来い。」

そう言って高速移動をして俺に重力魔法を掛けた奴の腹を殴る。

「ぐふっ！！」

また一人ドサッと倒れる。

「あとはお前ら三人だけだな。」

そう言って3人を見据える。

「ラカン・大輝、どうするのじゃ？」

「どうすると言われてもなあ……」

「ああ、ジャンンバは俺ら三人が同時に掛かって来ても傷一つつけないだろうし……」

「ああそうだ。どう頑張ってもお前らじゃ俺に傷一つ負わせる事は出来ん。諦めるんだな。」

そう言っで身体を分解して、子供の後ろに現れ頭をゴン！と殴る。

「ぬあ！！」

ドサッと倒れラカンと大輝という奴は飛び退く。

「くそお、こうなりや自棄だ。ラカン！同時に仕掛けるぞ！！」

「わかったぜ！！」

そう言っでラカンは拳で、大輝は剣で俺に突っ込んでくる。あの剣は確か：エクスカリバーだったかな？

「うおおおお！！！！」

ラカンの突き出された拳を俺は身体をずらして避ける。

「もらったあああ！！！！」

大輝がエクスカリバーで横に斬りかかって来るが俺はジャンプしてそれを避け、尻尾でなぎ払う。

「ぐわあああ！！」

ズザザザッと地面を滑る様に吹っ飛んでいく。

「ラカン、お前だけは簡単に気絶させてやらんぞ。」

「へ、そいつは光栄だなっ！」

そう言つてラカンは拳のラッシュを仕掛けてくるが俺もラッシュで対応する。

「エクス」

後ろから何か声が聞こえる。まさか撃つ気か？

「カリバー……！！！」

振り下ろされたエクスカリバーから光線が飛んできた。だが俺はラカンから飛び退き、分解してさける。

「ちょ、おま、大輝いいいい！！！？？」

そして放たれた光線はラカンに命中した。

「し、しまった！？？」

「ばかが、どこ狙つていやがる。」

そう言つて俺は後ろに姿を現した。

「くっ！！」

大輝は後ろに飛び退く。

「エクスカリバー。確かにいい剣だが俺には全く効かんぞ。まあドラゴンボールが異常なんだがな。」

「エクスカリバーとドラゴンボールを知っているって事はやっぱりお前も転生者か!!」

「まあな、俺はトラックに轢かれて気づいたらジャネンバになっていたんだ。」

「何でよりによってジャネンバ何だよ!こんなの勝てるか!!」

「まあそう悲観するな。今、楽にしてやる。」

そう言って構えるが、要塞の中に気がもう無い事に気づく、どうやら無事に撤退できたようだ。

「ふむ、どうやら無事に撤退出来た様だ。俺は撤退の支援に来た訳だからもうここには用は無い。運が良かったな。俺は帰らせてもらう。っとその前に。」

そう言って俺は右手を上に向け、でかい気弾を作る。10メートルはあるかな。

「1分待つてやる。その間にその汚いボロクズを片付けておくんだな。さもないと橋と一緒に木端微塵にしてやる。」

俺がそう言い放つと、大輝は慌てて皆を橋から遠ざける。

「58、59、60!時間だ!!」

そう言って俺は右手を振り下ろす。それと共に気弾が下に落ち、橋に衝突した。

刹那、ドゴオオオン！！と物凄い音がして、さらに中規模な地震が起きた。

橋の上には巨大なきのこ雲が上っている。煙が晴れると、そこには巨大なクレータしかなかった。

俺はその結果に満足しつつ、空間移動でグレートブリッジを後にした。

第8話（後書き）

戦闘描写難しいとです。

第9話（前書き）

今回少し短いです。

第9話

グレートブリッジから俺は空間移動をして、今俺は王宮に戻ってきた。

「ジャネンバ！！大丈夫じゃったか！！」

テオドラがそう言って駆け寄って来る。

「ああ、大丈夫だ。奴らで弱かったぞ。俺の相手になりやしねえ。」

「あ、あの紅き翼に勝ったのですか！？」

テオドラに念願してきた人が驚いてそう言う。

「ああそつだよ。確かにこの世界では奴らは異常だが、俺の方がもっと異常だっただけさ。」

「おお、なんと頼もしい。それで無事に撤退が出来たのでしょうか？」

「大丈夫だ、全員無事に撤退できたよ。それとついでに橋も木端微塵にしておいた。」

「す、素晴らしいですジャネンバさん！！貴方は帝国の英雄です！！」

「いや、俺は英雄なんて柄じゃ……」

大体ジャンバは邪念から生まれた根っからの悪だぞ？それが英雄だなんて笑えてくるぜ。

「いいえ！貴方は英雄ですよ！！姫様！ジャンバさんの功績を称え、式典を開いてはいかがでしょうか？」

「おお！それはいい案じゃ！さっそくお父様をお願いしてくるのじゃ！！！」

「ちょ！勝手に決めるなよ！！！」

俺がそう言うが全く聞いてくれず、さらに皇帝も許可を出してしまつたので俺は泣く泣く式典に出る羽目になった。

俺ら紅き翼は今、最悪の気分だった。

帝国最強の敵、ジャンバにコテンパンにされた俺達に掛けられた言葉は、称賛だった。

貴方達紅き翼のお蔭でグレートブリッジを無事に取り戻せました。ありがとう。

だがそんな言葉は逆に俺達を沈めていく。

「……ちくしょう。」

ナギがそう呟く。それもそうだろう。ナギは自分が世界最強の魔法使いだと、常日頃言っていたのに真っ先に倒れたのだ。その無様な姿に自分で自分を責め立てているだろう。

「まあそう悲観するなナギ。むしろその程度で済んで良かったじゃねえか。」

ラカンがそう言って励ます。てかよく生きているなラカン。

「良くねえ！！俺は何て無様なんだ！！真っ先にやられちまうなんてっ！！！」

「どちみち全員やられていたさ。それが早かったただけの話だ。」

「でも納得がいかねえんだよ！！！」

そう叫んでナギは折れていない左手の拳を血が出るくらい強く握り締める。

「しかし彼の強さは聞いていましたがまさかあれ程とは……」

「ああ、それに何だあいつの身体は！！俺の斬岩剣を分解して避けたぞ！！！」

「あれは俺も驚いたぞ。ジャンバと戦った時もあんなの見なかったからな。」

「わしもあれにやられてしまったからのう。全く気づけなかったのじゃ。」

「分解？何だそれは？」

見る前にぶっ飛ばされたナギが聞いてくる。

「あいつは身体を文字通り分解できるんだ。そして瞬時に別の場所に移動できるんだ。」

「な、何だよその能力は！そんな能力聞いたことねえよ！！」

「俺も聞いたことねえよ。それにジャンバは空間移動と言っていた。恐らくジャンバは空間を移動しているんだろ。」

「それなら移動中はこちらの攻撃は一切効かないと言う事ですか。まさかナギとラカンと大輝を超えるバグキャラが居たとは……」

そう言っただけでアルが溜息を着く。むしろバグじゃなくてチートだろ。俺もチートだけどさ。

「しかしジャンバと言ったかの？そいつをどうにかせねばわしらは負けてしまうぞ。」

「どうにかせねばってどうすればいいんだよ。」

「うゝむ……」

俺がそう言っただけでアルが唸る。

「大体ジャネンバには小細工なんて通用しないだろ。感じただろあいつの力を。それにまだ1万分の1の力も出してないらしいじゃないか。そんな相手に勝てるわけないだろ。」

悪いが俺は自殺志願者じゃないんでね。確かに俺は真祖の吸血鬼になつて最強になつてはいるがそれはネギまの世界での話。相手がドラゴンボール、しかもジャネンバだなんて無理だ。細胞一つ残らず消滅しては再生のしようがない。

「だから俺は戦うなといったんだ。次元が違いすぎる。」

ラカンがそう言うと、再び俺達は再び沈黙した。

第10話

グレートブリッジで紅き翼と戦ってから幾日が過ぎた。

帝国の起死回生の攻撃は失敗に終わったが、帝国の士気は減る所が増すばかりだ。

何故なら俺ことジャンバの活躍のおかげだ。

あの悪魔の様な紅き翼をまるで虫を散らすかの様に叩きのめしたからな。

この話は帝国中に瞬く間に広がり、俺は帝国の英雄になってしまった。

しかも連合には帝国の大魔王なんて中二病みたいな称号がつけられてしまった。恥ずい。

まあ確かに紅き翼を蹴散らして橋を木端微塵にしたけれどさ、どうせならもうちょっとマシな名前にしてくれよ。何だよ大魔王って、ピッコロかよ。

しかも何が起きたかは忘れたが紅き翼が何かやらかして連合から追われているらしい。今現在消息は不明になっている。

おかげで上の連中は大喜びだ。まあ紅き翼が居なければこの戦争、勝ったも同然だからな。

「ジャンバ。おるかの？」

そう言ってテオドラが俺の部屋に入ってきた。

「何だの用だ？ 街なら昨日行っただけだろ？」

「違うのじゃ！ 妾はこれから会談をしに行くのじゃ。」

「会談？ 一体何の話をするんだ？」

「実はこの戦争を終わらせるためにオスティアのアリカ姫が妾と会いたいそうなのじゃ。」

「ほう、だがそう簡単に終わらせられるのか？」

「難しいじやろうが妾もこの戦争を早く終わらせたいのじゃ。だから最善を尽くすのじゃ。」

「良い心掛けだ。それで俺に何の用だ？」

「その会談の護衛を頼みたいのじゃ。事情で大人数では行けないから。」

「まあ護衛が俺の仕事だからな。それで何処に行けばいいんだ？」

「今回は妾のプライベート船で行くから別に飛ばなくてもいいのじゃ。非公式の会談じゃから見つかりと厄介じゃからの。」

「なるほど。」

まあ俺は魔法なんて一切使えないからな。認識障害何て魔法もある

し、中々魔法も侮れん。

「それで何時出発するんだ？」

「もう準備は出来ておるのじゃ。今からすぐに出発するのじゃ。」

「さいですか。」

あの後、飛行船に乗った俺達は会談が行われる場所に向けて出発した。

それにしても流石皇族。プライベート船はかなり豪華で武装もしている。

暫くダラ〜としていると、城らしき建物が見え始めた。

「ジャンンバよ、そろそろ降りる支度をするのじゃ。」

「はいはい、っと言っても俺持ち物なんて持ってないがな。」

「まあ非公式の会談じゃしの。」

テオドラとそう話していると、飛行船が着陸した。

「それではジャンンバ。しっかりと護衛をするんじゃないぞ？」

「まかせろ。テオドラには指一本触れさせん。」

「それは頼もしいの。」

俺とテオドラは城の中に入っていった。

「ふむ、中々の広さじゃの。」

俺とテオドラは今、用意された部屋の中に居る。

流石に王族同士が話し合うだけになんか豪華だ。

テオドラからしたらそれでも中々のレベルらしいが、贅沢だねえ。

しかしこの城の中にはかなりの数の気が感じられるな。俺達を捕まえる気だな。

そう思っていると、どうやら来たようだ。

あれがアリカ姫か。本当に俺内容を忘れているな。どんな姿だったのか全然思い出せなかった。

アリカ姫は俺の方を見て、驚愕した顔をしている。

「なっ！？お前は帝国の大魔王！！なぜここに！？」

「ジャンンバは妾の護衛じゃ。安心せい。」

「帝国の大魔王自ら護衛とは…」

アリカ姫が何か呆れている。

「まあそれは置いて、本題に入るのじゃ。」

テオドラがそう言うと、アリカ姫もキリっとする。

「私はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。話の場に来てくれて感謝している。」

「妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじや。妾もこの戦争を早く終わらせたいのじゃ。気にするでない。」

そんな感じで話が始まったが俺は護衛なのでボーっとしている。暫くすると城の中に居た気が動き始めた。そろそろお客さんがくる時間か。

「ちよつとストップ。お客さんが来た様だ。」

「お客？もしかや嗅ぎつかれたのか？」

「その様だ。」

そう言っただけ俺は気が集まっている右の壁に手を向ける。

「はっ！！」

ドヒュン！っと俺の手から気弾が飛び、ドカン！っと気が集まっている右の壁に命中する。

「ぐわああああ！！！？」

「な、何だああ！？」

「ちくしょう！痛え！痛えよ！！」

最初の一撃でかなり混乱した様だ。

「な、なんじゃ！？何が起こったんじゃ！？」

「襲撃だよ。情報がダダ漏れじゃねえか。」

「すまん。まさかこんな事になるとは。」

「気にするな。そんな事より早く逃げるぞ。」

そう言っただけ俺は左の壁に気功波を放ち、外に出る通路を開く。わざわざ罠が張られている通路に行く必要も無い。

「無茶苦茶じゃ……」

アリカ姫が何か言っているが知らん。

「「こちゃこちゃ言っでないで早く出るぞ。」

そう言つて俺は二人を抱きかかえる。

「ちょ！ジャネンバ！！何をするのじゃ！！」

「お、お主なにをっ！！」

「時間が無いんだしうがないだろ。後舌嚙むなよ。」

そう言つて俺は通路を一気に飛んで外に出る。

飛行船を目指すが、既に壊されていた。

「ちっ、ぶっ壊されてやがる。」

「ああ、妾の船が……」

「まあ取りあえずここから離れよう。っとその前に」

そう言つて俺は城から少し離れた所で二人を降ろす。近くに気は感じられないから大丈夫だろう。

「お主、何をする気なんじゃ？」

アリカ姫が聞いてくる。

「なに、ちょっと害虫を駆除するだけさ。」

そう言つて空を飛び、両手を後ろに構える。ベジータ、技を借りるぜ。

「ギャリック砲――！！！」

ドヒュウ！！と放たれたギャリック砲は城に命中すると、大爆発を起こした。

ズドーン！！と物凄い音がし、さらに地面が揺れる。そして突風が吹く。俺は高速移動で二人の前に出て、二人を支える。

「のわわわわ！！？」

「ぬぐうつ！！！」

やがて突風が収まったので、二人が城の方を見ると、絶句した表情になる。

なぜなら城があつた場所には巨大なクレーターがあるからだ。城は文字通り消滅した。

「な、なんと……」

ようやく搾り出した様な声でアリカ姫がそう呟く。

「す、凄いのじゃジャンバー！！」

逆にテオドラははしゃぎ回っている。

「……紅き翼が負ける訳じゃ……」

「あたりまえじゃ！ジャンバは紅き翼なんかには負けないのじゃ！！！」

小さく呟くアリカ姫にテオドラがまるで自分の事の様に言い放つ。

「それよりアリカ姫。帰るあてはあるのか？」

「……無い。と言うより私はもうオスティアには帰れない。」

「何でじゃ？」

「オスティアはもう大部分が完全なる世界に握られておる。恐らくこの襲撃もそこから漏れたのだろつ。」

「完全なる世界？聞いた事ないのう。」

完全なる世界、聞き覚えがあるな。

「こいつ等が裏で戦争を操っておったのじゃ。奴等にとって今戦争が終わると不都合な事が多いらしい。だからここを襲撃したんじやろつ。」

「ふん、完全なる世界？そんなの叩きのめしてやるよ。」

「…お主なら出来そうじゃな。」

「ジャンンバで良いぞ。」

「そうか。なら私もアリカで構わん。」

「それでアリカ、どうするんだ？俺達も何時までもお前の面倒を見ている暇も無いぞ。」

「うゝむ、協力体制にある紅き翼に接触出来ればいいんじゃないか…」

「それなら送ってやってもいいが。」

「は？し、しかし居場所が…」

「俺はどんなに遠くに相手がいても気で探知できるんだ。居場所
は分かるよ。」

「……もう驚くのも疲れたわ…」

そう言つて溜息を吐くアリカ。おうおういけませんな、幸せが逃げ
るぞ。

「まあとりあえず紅き翼の所に行くか、テオドラ、乗れ。」

俺は身体を横にして飛ぶ、テオドラがそこにピョンとジャンプし
て乗る。

「私は一体何処に乗れば…」

「俺がお前を掴む。」

「え、えええ！？」

「しょうがないだろ。こんな状況なんだから。」

「うっ、しょうがない…これも世界のためじゃ…」

アリカがそう言うので俺はアリカの服を掴む。

「それじゃ、行くぞ。」

そう言うて俺は紅き翼の所に飛んで向かった。

第10話（後書き）

だんだんクオリティが低くなって来てる…

第11話

その後、丸一日掛かってようやく紅き翼がいる所に着いた。

テオドラだけならもつと速く行けただろうが今はアリカもいるし、速度が出せなかった。

おまけに姫様達が我が俣で頻繁に地上に降りていたので余計に時間が掛かったのだ。

まあ無事に着いたから良しとしよう。

「ここが紅き翼の秘密基地か…なんじゃただの掘立小屋ではないか。」

流石王族、俺の目からしたら結構大きいのに掘立小屋扱いしやがった。

「まあそう言っな、とりあえず紅き翼と話をしよう。」

そう言っ俺はドアの前に立つ。

「ちわゝ佐川急便です。アリカ姫をお届けに参りました。」

そう言いながらコンコンとドアをノックする。すると後ろにいる二人はズルっとずっこけ、家の中ではドンガラガッシャーンと物が倒れる音がする。カオスだ。

バン！と勢い良くドアが開かれる、どうやら紅き翼全員いるよう

だ。

「てめえはジャネンバ！何でてめえがここに居やがる！！」

ナギが叫ぶように言う。正直かなり煩い。

「アリカを届けに来たんだよ。さっき言っただろ。」

そう言っただけは後ろを指差す。ナギは姫さん！？と驚いている。ちゃんと話は聞けや。

「それじゃアリカ、もう俺達に用は無いから帰らせてもらっぞ。」

「待つんじゃ！ここで主君と話がしたい。帰るのはもう少し後にして欲しい。」

「だとさ、どうするテオドラ？」

「ふむ、まあよかつ。」

「すまん。恩に着る。」

そう言っただけは紅き翼の方を向き、今現在の状況を説明せよと言った。

「連合にも帝国にも…アンタのオスティアにも味方はいねえ。」

「それどころかオスティアの上層部が最も黒いと、その可能性さえも上がっています。」

「やはりそうか。」

絶望的な状況にも関わらず、アリカは不敵な笑みを浮かべていた。

「連合に帝国、そして我がオステイア。世界全てが我らの敵というわけじゃな。」

そう言っているアリカの顔は覚悟を決めているかの様に晴々としていた。

「じゃが…お主とお主の紅き翼は無敵なのじゃろう？それに帝国の大魔王もおるしの。」

え？俺も入ってるの？そう言おうとしたが日本人特有の空気を読むスキルで黙っていた。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの9人、じやが最強の9人じゃ。」

あ、やっぱり俺入っていやがる。この為に呼び止めたのかよ。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギと、我が盾と我が剣となれ。」

そう言っただけアリカは手に持っている黄金の剣を構えた。それを見たナギは不敵に笑っている。

「へ、やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

こうして小さな反撃、されど大きな反撃が始まった。

「テオドラ、何か俺達も戦う羽目になってるんだが。」

「まあ良いではないか。腐った重鎮共を掃除できる絶好の機会じゃ。」

「でもさすがに帰らないと不味いんじゃない？」

「大丈夫じゃ。お父様が何とかしてくれるのじゃ。」

皇帝…胃薬でも送ってあげようかな…

その後、皇帝の胃の調子を案じながら、俺達はこれからの事を話した。

結構かつこいい事言っていたが相手がどこにいるのか分からなければ攻撃のしようがない。それで頭脳班と肉体班に分かれて行動している。因みに俺は肉体班だ。敵を見つけて叩きのめす。俺に情報収集なぞに合わん。それにこの身体じゃすぐに見つかってしまっからな。

俺達が行っている活動は地味だが、それなりに効果があるようで仲間も徐々にだが増えてきた。

時々ナギが俺に喧嘩を売ってくるが適当にボコボコにしてその辺に捨てておく。

だが流石は英雄、どんどんと実力を上げていやがる。今では本気ではないにしろ冷つとされる攻撃も出始めた。まあ1万分の1の力を出したら瞬殺できるが。

因みにラカンは力の差が分かっているらしく、喧嘩は売ってこない。まあ模擬戦はしているが。

また何時もの用に喧嘩を売って来たナギをボコボコにしていると、タカミチが話しかけてきた。

「ジャンンバさん！僕に稽古をつけてください！！」

「え？何で俺が、ガトウがいるじゃねえか。」

「確かにそうですけど…それでも魔法を使わずにナギさんを圧倒するジャンンバさんには是非稽古をつけてもらいたいです！！」

そう言つて日本人もびっくりな土下座をしてきた。何か周りから冷たい視線が…

「お願いします！！僕に稽古をっ！！」

「…わかった。わかったから顔を上げてくれ。周りの視線が…」

もしかタカミチはこれを狙ったのでは？恐ろしい奴だ。

まあそう言うことで俺はタカミチに修行をつけている。決して稽古ではない。

まあ気を感じられる事は出来る様なのでとりあえず肉体強化をやらせた。50キロの重り着けさせながら。最初の方はこいつ死んでんじゃね？っていうくらいバテていた。おおタカミチよ、死んでしまうとは情けない。

まあ最近はずぐにはバテない様になったが、そろそろ重量を増やすか。そしてそろそろお待ちかねの気の修行も並行して行っ。俺としてはギャリック砲を覚えさせたいが難しいのでかめはめ波を教えさせることにした。と言ってもまだ先のことだが。

まあこんな感じで早数ヶ月、ついに最終決戦が始まろうとしていた。

第12話

あれからいろいろあったがいよいよ最終決戦の時が来た。

俺は今、テオドラの乗っている戦艦に乗っている。

「しかしかなりの数だな。かなりの金がかかりそうだな。」

「負ければこの世界は終わりなのじゃ。いまさらそんな事言っている暇はないのじゃ。」

「それもそうか。」

俺はテオドラには危ないからと、帝国の宮殿に置いていこうとしたのだが、テオドラは世界の危機にじっとなんかしてられないのじゃ！　！　！　と言い大艦隊を率いて決戦の地、墓守り人の宮殿に今現在向かっている。あいかわらず行動力ありすぎるだろ。

「さて、俺は先に行って来るぞ。紅き翼の皆さんは既に攻撃を始めているようだ。」

「うむ、そうか。気をつけて行って来るのじゃぞ。」

「わかったよ。」

そう言っ俺は気をたどり紅き翼の所まで空間移動をした。

俺が空間移動で紅き翼の前に出ると、白髪の少年がナギに首を掴まれていた。

「あれ？もう終わっちまったのか？」

「ん？ああジャネンバか。どうやらその様だ。」

ラカンが俺の存在に気づき、振り返りながらそう言う。

「ちつ。俺の出番が無いじゃないか。来て損した。」

そう言うが何か引つかかるんだよな…思いだせん。

「まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

白髪の少年がそう言うと同時に、殺気が向けられた。

向けられた方を見ると、でかい光線がこっちに向かってきた。

俺は高速移動でその光線の前に出て、両手で光線を抑える。

「ぬっぐぐぐぐー！！」

この世界に来てから一番強い攻撃だ。ネギまでは驚異的な戦闘力だが、本気を出してないにしろ、戦闘力1500億のジャネンバには敵ではなかった。

「うぐぐぐ!!でやあああー!!!!」

俺は光線を上に弾き飛ばした。光線は天井をぶち抜き、空に消えていった。

「はあはあ、へ、どうやらまだ骨のある奴がいるようだな。」

見ると、黒いローブを纏った男が出てきた。ほう、こりゃ紅き翼では勝てんな。戦闘力が違いすぎる。

「驚いた。まさか私の魔法を弾き飛ばす奴がいるとはな。」

「あの程度の威力じゃあ、俺を倒すことなどできないな。」

「おもしろい。奥で待っている、死にたければ来るんだな。」

そう言っただけの黒いローブを着た男は奥に戻っていった。

後ろを振り向くと、何故か皆がカーンとしていた。

「何馬鹿面していやがるんだ。」

「い、いやあの攻撃を簡単に弾き飛ばしたんなら啞然とするのも無理ないだろ。」

大輝が何か言っているがお前ジャンバの強さ知っているだろ。ネギまとドラゴンボールでは戦闘力の差がありすぎる。しかも俺が憑依したのはあのジャンバだぞ?あの野郎でも俺には勝てん。

「まあそんな事より、お前らはさっさとここから出る。」

「ジャネンバはどうするんだ？」

「決まってるだろ。あいつを血祭りに上げてやる。」

そう言っ^てて気を上げる。俺の周りから突風が吹き荒れ、建物がギシギシと音を立てる。

「ま、まて！？こんな所でそんな力を出すな！！墓守り人の宮殿が壊れるぞ！！」

ラカンが叫ぶようにそう言っ^つ。

「心配するな。ここではそんなに力は出さん。」

そう、ここではな。

「よし、いくか！！」

そう言っ^て俺は宮殿の奥に飛んで行っ^つた。

「ほう、よく逃げずに来たな。」

「それはまた面白い冗談だ。逃げるのはお前の方じゃ無いのか？」

俺は黒いローブを着た男と対峙している。威圧感が結構あるな。

「私は造物主。始まりの魔法使いとも呼ばれている。」

「俺はジャネンバ。とある世界から来た邪念の戦士だ。」

そう言っただけ俺は身体を分解する。

「なに!？」

造物主が驚いているが、俺は構わず後ろに出て蹴り上げる。

造物主がドコーン!!と音を立てて天井を突き破る。俺もその後が続く。

「どうした?そんな程度か。もっと本気でやって欲しいな。」

そう言っただけ俺は1000分の1の力を解放させる。俺の身体に紫の気の炎が包み込み、大気がビリビリと振動している。

「くっ!うおおお!!!!」

造物主はそう叫んで魔方陣を展開し、複数の黒い魔弾を放ってきたが、遅い遅い。

俺は魔弾の嵐を避けながら近づき、造物主の顔面を掛けて殴りつける。

「おらあ!!」

ドゴン!!と俺の右ストレートが顔面に入り、造物主が後ろに吹

き飛ぶ。俺はすかさずピチュンと高速移動をして造物主の後ろに現れ、その背中を殴りつける。

「ぐはあ!!?」

急降下して落ちていく造物主にまた高速移動をして落ちてくる造物主の腹目掛けて殴りつける。

「がはああ!!??」

造物主の身体がくの字に曲がり、ビチャビチャと血が口から噴き出される。

「それとも、本気でやってこのザマだったのか?それは悪い事を言った。謝るよ。」

「がふっ!ぐふ…」

どうやらもう話す力も無いようだ。もうそろそろ飽きたから終わりにするか。

俺は造物主を持って高度を上げる。大体1万メートルぐらいまで来ただろうか。俺は造物主を上投げる。このままでは造物主は宇宙をさまよいつつ死ねことになるが俺はそこまで鬼じゃない。一瞬でこの世から消し去ってやる。

俺は両手を左右に広げ両手に気を溜める。ある程度溜まったら両手を前に突き出し、結合させる。そのあまりの気の強さに、雲は一斉に離れ、気からは雷が鳴っている。

「くらえ！ファイナルフラッシュ！！！」

俺の両手から勢い良く放たれたファイナルフラッシュは、既に豆粒の様になるほど遠くに飛んでいった造物主を簡単に飲み込み、数百年離れた場所で爆発した。

ふう、終わった。そう思って周りを見ると、雲が一つも無かった。どうやら周囲にある雲全部吹き飛ばしてしまったらしい。やはりファイナルフラッシュはやりすぎたか。

まあ終わったからいいかと俺は地上に降りると、またもや皆ポカーンとしていた。

「何だ？さっきよりも馬鹿面になっているぞ？」

「……何だ今の技は……」

ラカンが搾り出した声でそう言った。やはりネギまの世界でファイナルフラッシュはやりすぎたな。

「ファイナルフラッシュと言ってな、当たれば魔法世界は粉々に消し飛ばぞ。」

「……何かもう驚くのも疲れてきたぜ。」

ナギが呆れたようにそう言う、ナギに言われると腹立つな。

「そう言えばお前らここから出ると言ったのに何故まだ残っているんだ？」

「は！？そつだ！姫子ちゃんを助けなければ！！」

ナギがそう言つて探しに行こうとしたが、突如地面が揺れた。

「な！？もう儀式が始まつてしまつたのですか！？」

いつも冷静なアルが叫ぶようにそう言う。確か魔法が使えなくなるんだっただかな？俺には関係ない話だ。まああれを消せば良いんだな。

「ほーう、じゃああれを跡形も無く消せば無事解決つて訳だな。」

「な！？ばか！やめろ！！あの中には姫子ちゃんがいるんだぞ！！」

「その人間一人に全世界を滅ぼす気が！！」

俺はそう言つてギャリック砲の構えを取るが、何やら大艦隊がやつて来た。そついや居たな。

この後、木端微塵にされる事無く、封印された。

あれ？そついえばゼクトが居ないな。何処にいつたんだ？

第12話（後書き）

最後が適当になってしまった。

第13話

墓守り人の宮殿で最終決戦をして見事勝った俺達は、戦争終結を告げる記念式典に出ていた。

まあ紅き翼で居るのはナギとラカンと詠春だけなんだけどね。他の奴らは何処にいったんだよ。羨ましいなこんちくしょう。式典なんか大嫌いだ。

俺と紅き翼は大衆に囲まれながら帝国と連合の魔法使いと鬼神兵達に警護されつつ記念式典の会場に向っている。てか護衛なんぞいらんだろ。誰がこんな恐ろしい面子を襲うんだよ。

それになんか鬼神兵達が俺に怯えているんだが、もう慣れた反応だけどさ。さすがに傷つくよ。

会場に着いたらそれぞれメダルが授与される。別にこんなのいらんけどな。

「しかし、凄い数の群衆だな。」

「当然じゃ！何せジャネンバ達は魔法世界の英雄なのじゃからな！」

帝国所か世界の英雄になっちまったよ。何度も言うが俺は英雄なんてガラじゃねえのにな。

「…まあ、なっちまったもんはしょうがねえか。」

「そうじゃ。妾と出会ったのが運のつきじゃ。」

「随分と刺激的な出会いだったがな。このじゃじゃ馬姫が。」

「むゝ！うるさいのじゃ！！」

頬を膨らませて怒るテオドラに俺は苦笑いを浮かべる。まあ、こういうのも悪くねえな。

こうして記念式典は熱狂と共に幕を閉じた。

因みに余談だが帝国は連合に領土の割譲と第一次大戦のドイツ並の賠償金を要求した。

もちろん連合は拒否したが皇帝がなら滅ぼすまでだと言い切ったので連合は泣く泣くこれを承諾した。

まあ俺が居るからね。連合は承諾するしかないだろう。ざまあ。

「はあ、まったく。今日は疲れたぜ。」

あの後かなりの数のマスコミから取材が殺到して精神的にまいった俺は今日泊まる予定のホテルに避難していた。

「あれだけの事をしたのにこれしきの事で疲れるとは情けないのう。」

「肉体的ならいいが精神的なのはきついんだよ。てかよくテオドラは平然としていられるな。」

「まあ妾は王族じゃからな。こついつのは慣れておるのじゃ。」

「ほう、こりゃテオドラは絶対早く老けるな。」

「な、なんじゃとー！？」

何か叫び声を上げながら膝を突いてorzの格好をするテオドラ。

「まあテオドラはヘラス族だからまだ遠い未来だろうけどな。」

「うう、早く老けるのは決定事項なんじゃな。」

虚ろな目をしながら立ち上がるテオドラ。

「俺はもう寝るぞ、今日は疲れた。」

まあ俺は無視して寝る。今日はかなり疲れてんだよ。

「失礼します！！姫様！ジャンンバ様！緊急事態です！！」

あの後俺達は寝て今は朝になったが気持ち良く寝ていた所に、突如勢い良く扉が開かれ、伝令の兵士が肩を上下に揺らしながら入ってきた。

「なんじゃ！一体何事じゃ！？」

テオドラがベットから飛び降りて事情を聞く。

「先ほど、オスティアが崩壊したとの情報が入りました！！」

「な、なんじゃと！！？何が起こったのじゃ！！」

テオドラが目を見開いて言う。

「今現在調査中で詳細は不明です。」

それに対し予想していたのか伝令は冷静に話した。

「ふむ、紅き翼に聞いたほうが良さそうだな。」

あいつらは国家よりもいい情報を持っているからな。てか団体で国家を上回るって凄いなおい。

「テオドラ、ちょっと紅き翼の所に行つて来る。」

「わかったのじゃ。早く帰つて来るのじゃぞ。」

「お前は俺の母親か。」

軽口を言いながら俺は気を探る。ちょうど紅き翼が集まっている所があったので俺はそこに空間移動をした。

空間移動で俺は紅き翼の後ろに出た。

「おい、オスティアが崩壊したと聞いたが何があったんだ？」

俺がそう言つと、俺の存在に気づいたのか俺の方を見る。

「ああ、ジャネンバか。」

ナギが答えるが何時もの元気が無かった。これはただ事じゃねえな。

「実は儀式の封印は完全ではなかったのですよ。代償として王都を中心に50キロ圏内は以後魔法が使えない不毛の大地と化したんです。それでオスティアに浮かんでいる大小の島々が全て落ちてしまつたんです。」

「なんじゃそりゃ、アリカは自分の国を犠牲にして世界を救つたのか。」

「ええそうです。おかげでアリカ姫は戦争犯罪人として捕まつてしまいましたよ。」

「ふん、つまり生贄という訳か。」

本当に連合は末期だな。自分達の失態を他の者に擦り付けるとは日本の政治家といい勝負だ。

「それで、お前らはこれからどうするんだ？このまま腐っているのか。」

俺がそう言つと、ナギが勢い良く立ち上がった。

「そんなわけねえだろ！！俺だって今すぐにも姫さんを助けに行きてえ！！でも、それじゃあダメなんだ。姫さんはそんな事望んじやいねえ。」

そう言つていつも強気だったナギとは別人のようになるナギ。

「ふん、そっちにはそっちの理由があるのか。俺は帝国側だから関係ないが、まあ数ヶ月共に過ごした仲だ。下手に動けないが少しは手伝つてやってもいい。」

そう言つて俺は空間移動でテオドラの元に向つた。

第14話

「メガロメセンブリアの馬鹿共が、そこまで腐っていたとは。」

あの後俺達はヘラスに帰ってきて今、俺は皇帝にオスティア崩壊の真実を話していた。

皇帝は怒り心頭のような。誇りが高い皇帝にとって、この事は許せないのだろう。

「しかし我々は帝国だからな。下手に動く和不味い。」

「そうだろうな。戦時中なら良かったが今は平和に向けて交渉中だ、国民も戦争が終わると喜んでいいるから国際問題を犯すのも不味い。」

アリカの問題は完全に連合が責任を持っているからな。下手に干渉出来ない。

「…まあ、我々に出来ることは少ないが、やらないよりはマシだろう。」

「すまん。無理を言つて。」

「何、お前は我ら帝国の英雄だ。その英雄の頼みなら少しぐらいの無茶はしよう。それにこの事に関しては俺もかなりきているんだ。

そう言つて笑顔を向ける皇帝。

「そうだな。俺らに出来る事は少ないが、それでも奴らに一杯食ら

わしてやるう。」

こうして帝国は裏秘密だが紅き翼と協力体制をひいた。

そして2年後、遂にアリカの処刑の日がやって来た。流石にこれは止められなかった。今頃メガロメセンブリアの汚職議員達は醜い笑顔をしているだろう。ここからが本当の地獄だとも知らずに。

俺は今、アリカが処刑されるのに使われるケルベラス溪谷に潜んでいる。俺は帝国側だから表立つての行動は出来ない。だがここなら誰も来ないから好きにやれる。

ケルベラス溪谷は魔法が使えないと聞くが、気しか使わない俺には関係ない。仮に気も使えないとしてもこの程度の魔獣には負けはない。

そんな事を思っていると、ナギが来た。

「随分と遅い到着だな、騎士さんよ。」

「うるせえ、ジャンンバの方が異常なんだよ。」

「へ、まあな。道は俺が作るからお前は一気に駆け抜けろよ。」

そう言いあっていると、上が騒がしくなった。どうやら始まったよ

うだ。

「もうそろそろだな。ちゃんと受け止めるよ？騎士さんよ。」

「へ！言われなくても！！」

上からアリカが落ちてきた。魔獣が顔を上に向けて食おうとするが、俺はあらかじめ召喚しておいたデイメンションソードを魔獣に向けて一振りする。飛んでいった気？の刃がアリカを食おうと首を上にした魔獣の首を切り落とす。

そうしている間にナギがアリカを受け止めた。アリカはかなり驚いている。

「な、ナギ！何故お主がここに！？」

「バーカあんたを助けに来たんだよアリカ。」

「こ、この愚か者め！いくらお主でも自殺行為じゃ。」

「へ、誰が俺だけと言ったんだ。」

「俺を忘れてもらっちゃ困るな。」

「じゃ、ジャンバ！！お主まで！！」

「俺は表立って行動出来ないからな。ナギ、さっさとここから撤退しろ。」

そう言って俺はデイメンションソードを横に振る。すると魔獣が真

つ二つになり退路が出来た。

「すまねえジャネンバ！！恩にきるぜ！！」

そう言つてナギはアリカを抱えて走り去つていった。

「お前達、あいつ等を追いかけて行つても良いぞ。ここを抜けたら
の話だな。」

そう言つて俺は気を高める。すると魔獣が怯えてしまった。

「ふん、つまらん。殺されたくなければさっさと俺の前から消えろ。」

そう言つと魔獣達はスゴスゴと奥に消えていった。

「ふう、終わった。今頃上では奴ら大暴れだろうな。流石の元老院
達も帝国がついていいるとは思わないだろう。」

そう言つて加勢してやろうと空間移動をしたが、何やら何時もと様
子がおかしかった。

何か次元に穴が開いている。穴は真つ黒で俺はだんだんとそこに吸
いこまそうになる。

これはやばいと俺は一度出ようするが何故か出れなかった。

そうしている間にもどんどんと穴に吸い込まれそうになる。これは
やばい！！

くっ！こんなもの！！こ、こんなもの！！こっ…っ！！

「うわあああ——！！！！！」

抵抗虚しく、俺は次元の穴に吸い込まれてしまった。

第14話（後書き）

と言う訳で、大戦編終了です。

この後どうしようかな。このままネギまを続けるか。
それとも別の作品に行くか。

それとも気分を変えて僕は戦闘民族サイヤ人 リリカルなのは編を
書くか。

作者的には3番目を書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576w/>

ジャネンバ戦記

2011年9月13日17時06分発行